151

市来貝塚（いちき）

（日置郡市来町大字川上字宮之後）

位置と環境

市来貝塚は市来町大字川上字宮之後に所在する。市来町と串木野市との境には八房川が流れている。この八房川上流約３㎞の標高約10ｍの舌状台地北斜面に縄文時代後期の貝層が形成されている。遺跡周辺は北側八房川に沿って水田が広がり，台地周辺部は宅地になっている。

調査の経緯

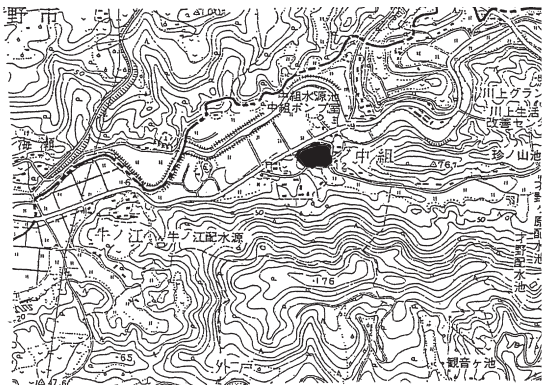
市来貝塚は大正９年に当時西市来尋常小学校に赴任してきた有村栄助により発見された。有村は山崎五十麿を呼び，大正10年３月に市来貝塚の発掘調査を実施し，調査の結果を考古学雑誌第11巻12号に「薩摩国日置郡西市来村貝塚に就いて」と題し，発表した。山崎の発表後，清野謙次・大山柏なども来町している。最初に市来式土器の命名を行ったのは三森定男で，ドルメン第４巻６号において「九州に置ける縄文土器の一型式」と題し市来式土器の説明を行ない，人類学先史学講座第１巻の「西日本の先史時代」の中で，初めて市来式土器の型式名を使用している。その後，寺師見國が小規模な発掘調査を行ない，昭和36年に河口貞徳が市来村の委託を受けて発掘調査を行った。

昭和36年の発掘調査

市来村は昭和35年に貝塚などが荒されている現状を問題視し，県教育委員会と協議をし，河口貞徳に委託をして発掘調査を実施することにした。調査は10日間行われ，貝層部分にＡＢ二か所のトレンチを設定し，発掘を実施した。結果，市来式土器や指宿式土器，その他多くの石器などを検出した。更にＡトレンチからは２体の人骨が，Ｂトレンチからも１体の人骨が発掘された。これらの人骨は長崎大学で復元され，身長約163.5㎝の高身で面長な顔立ちをした縄文人であることが分かった。

平成２年度の調査

貝塚の今後を考える上において，第二・第三の貝塚の存在の有無，また貝塚を中心とした集落の確認など課題が山積しており，市来町としては保存活用の点からしても調査が必要であると考え，県教育委員会と協議をし，国県の補助を受けて埋蔵文化財確認緊急調査事業とし，発掘調査を実施することにした。平成２年度の調査では10月１日から11月６日の間で実施された。貝層の範囲や規模を確認するために貝層部分を中心にトレンチを４本，集落が想定される台地部分に10本のトレンチを設定し，調査を実施した。貝層部分の１トレンチと，貝層上段に設定された４トレンチからは多くの遺物が出土した。出土遺物としては，土器，土製加工品，石器，貝輪，骨角器（垂飾品・釣針・簪等）等が出土している。また第８トレンチからは人骨が出土した。



第１図　市来貝塚の位置

貝層を構成している依存体の種類は，貝類ではアサリ，ハマグリ，サザエ，カキ，アカガイを始め，３類61科139種確認できた。獣骨・魚類では12,786ｇの依存体があり，その内哺乳類は11,769ｇでイノシシが最も多く，そのほかにシカ，サル，イヌ，タヌキ，オオカミなどである。特にオオヤマネコの橈骨が検出されたことは特記すべきことである。魚類は897ｇで，タイ類が最も多かった。

平成４年度の調査

平成４年度の調査は，平成２年度の成果を元に，集落跡が想定される台地部分と貝層の更なる調査を目的に実施された。期間は平成４年５月14日から７月23日の約２か月間である。

１トレンチは貝層部分に設定され，貝層は大きく三層に分かれていることが分かった。下層には出水式土器・指宿式土器が，上層には市来式土器が多く出土する傾向がうかがえた。そのほかに石器では軽石製品や，石錘が４点出土している。また，貝輪も

第２図　市来貝塚出土遺物１

多く出土し，貝種もタマキガイ，マルサルボウガイ，カバトゲウミギクガイなどが見られた。特にタマキガイの貝輪は製作工程がうかがい知ることが出来る好資料である。釣針は単式釣針で，無鐍のものが25本出土した。

４－Ｆ区からは西北九州型漁労文化の影響がうかがえる鋸歯状尖頭器が出土している。また，人骨も１体確認できた。恐らく貝層には人骨が多数埋葬されているものと考えられる。

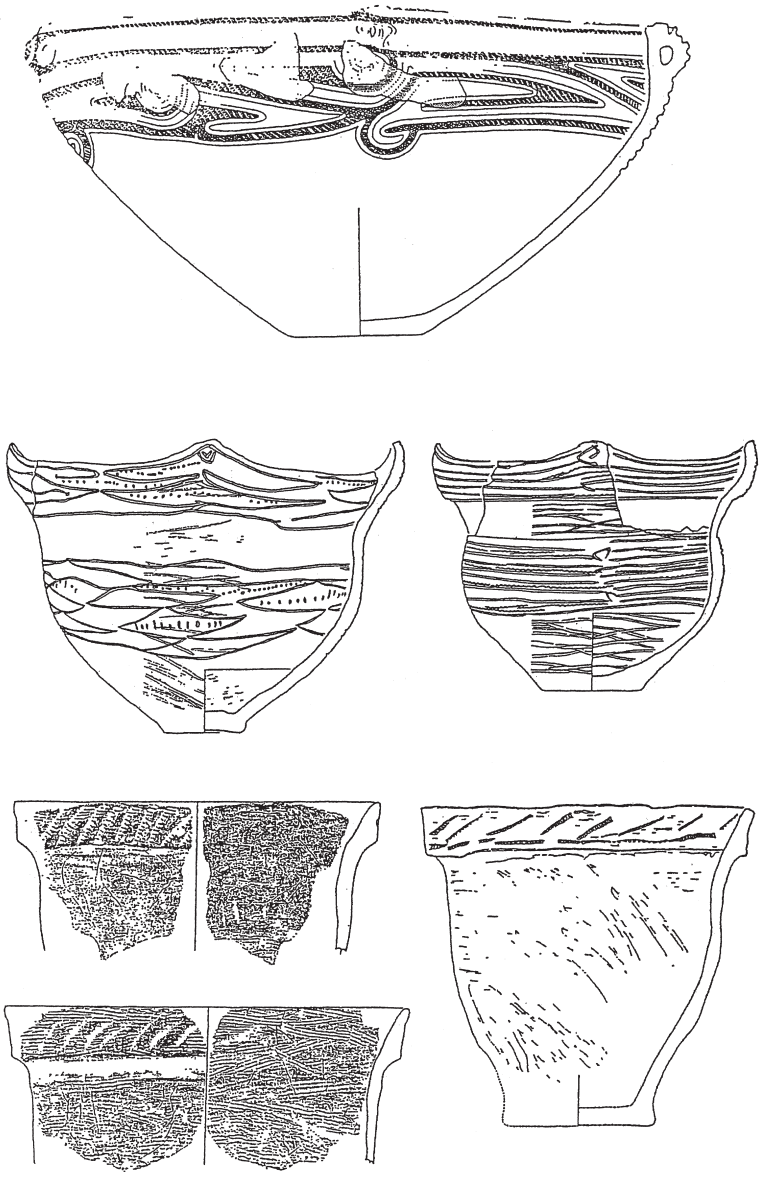
資料の所在

出土遺物は，市来町教育委員会に保管され，一部は市来アクアホール内歴史資料室に展示されている。

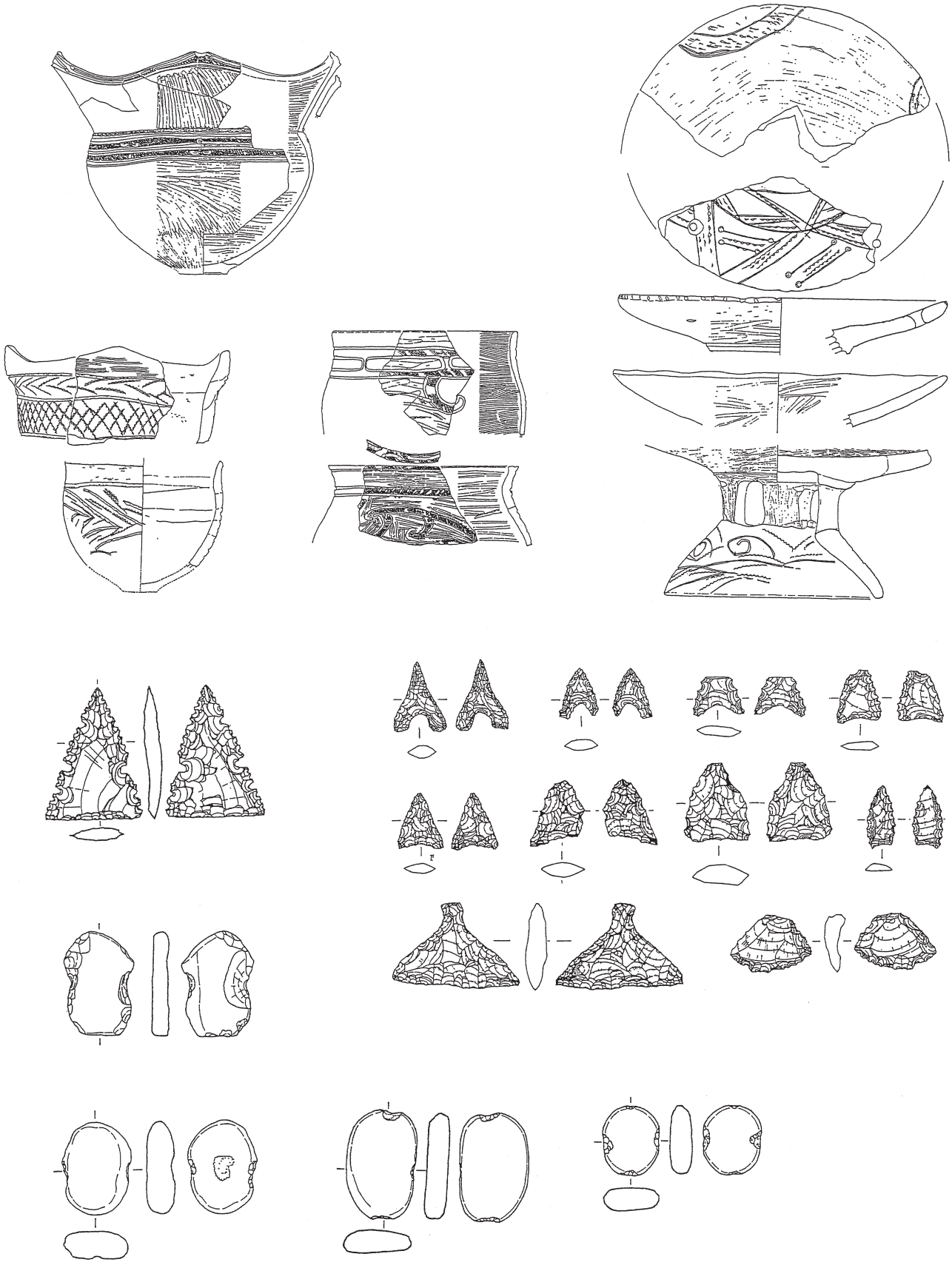
参考文献

市来町教育委員会1991「川上（市来）貝塚」『市来町埋蔵文化財発掘調査報告書』１
市来町教育委員会1993「川上（市来）貝塚２」『市来町埋蔵文化財発掘調査報告書』２
市来町1982『市来町郷土誌』

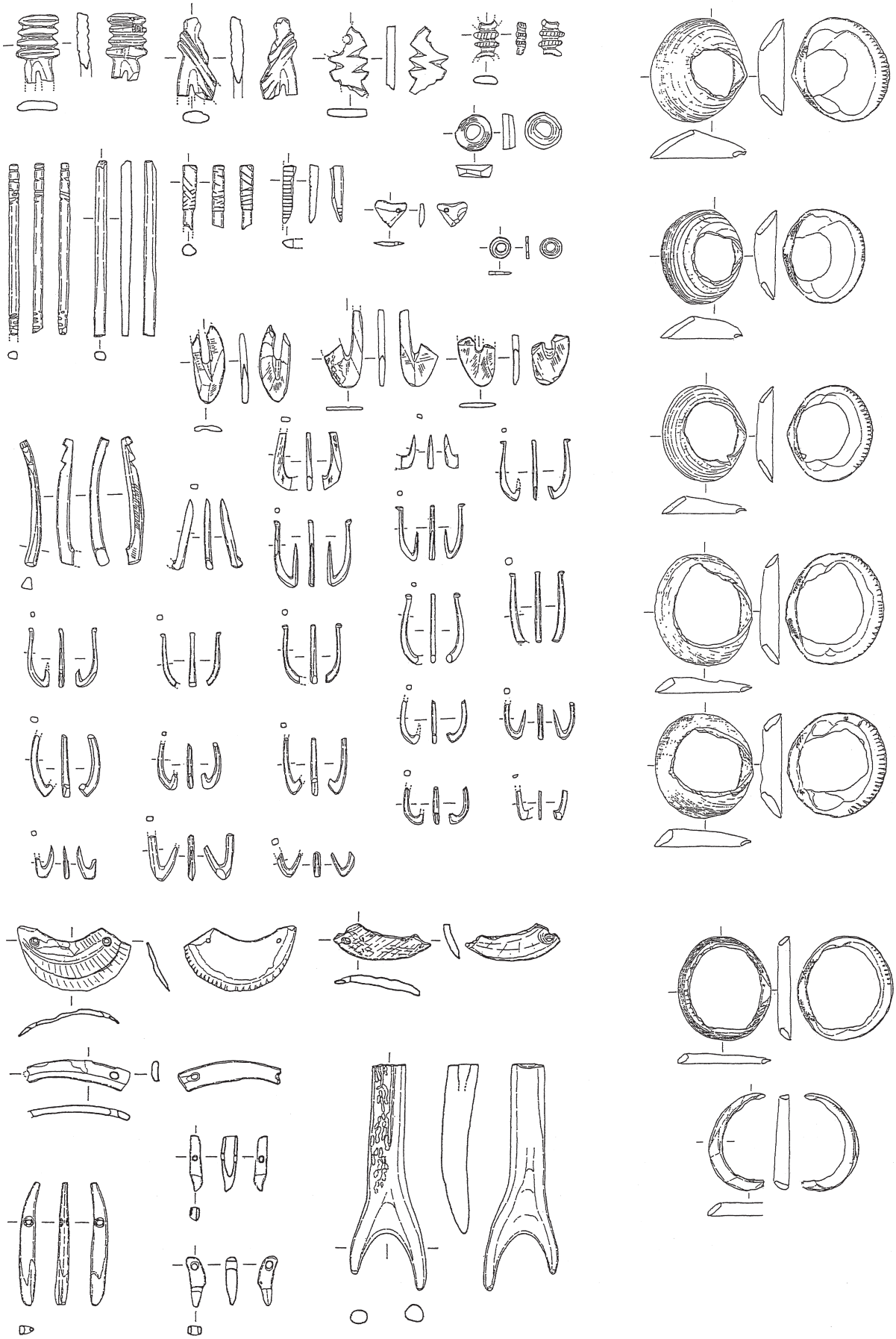
（新町　正）



第３図　市来貝塚出土遺物２



第 4 図　市来貝塚出土遺物 3



第 5 図　市来貝塚出土遺物 4